

～野球を世界中の人々の喜びと生きがいに～

世界野球普及計画マスタープラン

特定非営利活動法人アフリカ野球友の会
代表理事 友成晋也

0. 前書き「世界になぜ野球が必要なのか」

スポーツは、人々に「生きている」という実感を与えてくれる。スポーツは生きがいであり、喜びである。

これは全世界人類共通の認識であると思います。今やスポーツは人間生活にとって必要不可欠です。それは、先進国でも、開発途上国でも同じです。

しかし、開発途上国は得てして、金がない。すべての国家のうち、貧困削減を課題とする国がまだまだ多数である現実があります。そんな途上国で盛んなスポーツはサッカー。ボールひとつでできるから「サッカーは貧しい国のスポーツだ」とも言われます。

一方、野球は道具が必要である。だから、野球は金持ちのスポーツだ、とも言われます。

本当にそうなのでしょうか？

戦後の日本を振り返れば、人々の生活は荒廃し、まさに何も無い状態だった。では、少年たちは野球をやらなかったのか。彼らは、新聞紙を丸めてボールを作り、木の棒をバットに見立てて打った。戦後しばらくして、ゴムボールが生産されると、道具がなくてもできる手打ち野球や三角ベースが盛んになった。日本が、子供たちに道具を簡単に買い与えることができるくらいの経済力を有するようになったのは、ここ30年くらいではないのでしょうか？しかし、日本の野球の歴史は135年。夏の甲子園大会の歴史でも92年になります。

野球には、人々を虜にする魅力があります。その要素は人によってさまざまでしょう。

しかし、普遍的にいえることがあります。

野球は、みんなが公平に、順番に打席にたってヒーローになるチャンスが与えられる、民主的なスポーツである。

野球は、ボールを奪い合う戦闘的なスポーツではなく、ボールを介してお互いの能力を競い合う平和的なスポーツである。

野球の基本は、お互いが向き合ってコミュニケーションをとるキャッチボールが基本である。

少なくとも、この3点は、ほかのスポーツにない、野球の魅力です。野球を

やることによって、この不公平で争いの絶えない世界中の誰もが、民主的で平和的な時間を仲間とともに過ごすことができるのです。

野球が果たすことのできる役割。それは、きっと、我々の想像以上に大きく、そして広がりがあるのではないのでしょうか？

世界中の人々が、野球によって喜びと生きがいを得ることができる世界を目指し、この普及計画マスタープランを作成しました。

1. 世界における野球の現状

(1) オリンピック種目としての野球

世界の野球は、発祥の地アメリカを始めとした南北アメリカ大陸及びカリブ海諸国と、日本を筆頭に東アジア、東南アジアで親しまれています。また、欧州でも、地中海沿岸諸国を中心として、それなりに野球はマイナースポーツながら広がっているといえます。嫌米思想の中近東諸国と、広大なアフリカ大陸では、残念ながら、ほとんど普及はしていないというのが、おおざっぱな現状です。

そのような状況の中、1992年バルセロナオリンピックの時から、野球は正式競技となりました。当時、オリンピック種目として認められるためには、各大陸で三分の一の国に野球が普及されている必要がありました。そして、アフリカ大陸には、野球連盟のある国が17カ国。総国数50カ国のアフリカが「普及している」と認められたのです。

しかし、実情は、世界野球連盟が、強引に野球連盟をアフリカ各国に設立させ、条件を満たしたとも言われています。したがって、「野球連盟」とは名ばかりで、実態として野球が普及している(正確には、「多少の競技人口がある程度」)国はきわめて少数でした。その数、実質的には5,6カ国でしょう。

そんな現実から、2006年、野球はついに2012年のオリンピック種目から除外されることが決定しました。もう王ジャパン、長嶋ジャパンは北京を最後に見ることができなくなってしまいました。

(2) オリンピック種目除外の負の影響

この負の影響は世界の野球普及にとって、無視できるものではありません。

スポーツの興隆は、その競技がいかに世界とつながっているかにかかっています。オリンピック種目であるからこそ、人々は注目し、夢を見ることができると。特に開発途上国で、オリンピック種目でないスポーツが普及することはきわめて困難です。野球がオリンピック種目でなくなった今、野球は世界中の人々の視界から消えてしまったといえます。

2006年から、ワールドベースボールクラシックが始まり、日本国内では非常に盛り上がりました。しかし、残念ながら、これは自国の人気スポーツである

野球が世界一に輝いた日本だけの現象です。アフリカからは南アフリカ共和国代表チームが参加しましたが、アフリカ大陸でこの大会の存在を知っている人はほとんど皆無です。

つまり、野球がオリンピック種目から外れたことは、ボディーブローのようにのちのち効いてくるといえます。国民から注目を浴びる機会のない競技が、発展するわけもない。それは野球がない地域にみならず、現在盛んに野球が行われている地域の人々にとっても魅力が半減し、野球が世界に広まっていく機会を永遠に失ってしまう方向に収束しつつあるのが、現在の野球がおかれている現状です。

2. 世界に野球を普及させるための方策

(1) オリンピック種目復活の方策

このように致命的な傷を負ってしまった野球ですが、これをいかに反転させ、世界の人々に再び野球の喜びと生きがいを提供できるようになるのか。

この方策はたったひとつしかありません。『野球のオリンピック種目の復活』。これが唯一無二の道です。

では、どうすれば、野球が競技種目として復活していけるのか。この回答も非常に明快です。

野球が五大陸で普及する。

野球がオリンピック種目から締め出されてしまった要因が、アフリカとヨーロッパに普及していないこと。したがって、この2大陸に野球が普及することが条件になります。

しかし、ヨーロッパは、アフリカと比較すると、30カ国に野球連盟があり、それなりに予算を持って取り組んでいる国々ばかり。ある程度自助努力が期待できるといえましょう。

(2) アフリカにおける普及の課題

やはりもっとも大きな課題がアフリカ大陸の野球の普及であることは自明の理と言えますが、その壁は、とてつもなく高く、大きい。

アフリカの最大の課題は、貧困。そもそも金がなければ、スポーツ文化を育むことは難しい。これまで欧米を中心とした先進国は、スポーツではなく、貧困削減のためにアフリカに莫大な援助を行ってきましたが、まだまだ開発が進んでいない国・地域の方が圧倒的に多いのが現状です。

アフリカに野球を根付かせるのは無理なのか。アフリカの人々は野球に関心をもつことはないのか。

結論から言えば、アフリカに野球を普及することは可能です。いや、むしろ、アフリカには、大きな可能性がある。野球が貧困削減の一助ともなりえる。こ

れまでのアフリカを救うための方策とはまったく違うアプローチで、野球がアフリカの人々を、より人間らしい生活に導く可能性を秘めています。

(3) アフリカにおける野球産業

ではその方策とは何か。

それは、アフリカに野球産業を興すことです。

野球には道具が必要です。ボール、バット、グローブ、ベース、キャッチャー道具、ヘルメット、などなど。今までは、これら野球道具は、日本を始めとした先進国からの援助などでなんとかやりくりしていました。

これをアフリカで作るようになればよい。バット職人、グローブ職人を育てればよい。野球でメシが食える人材を育成し、増やしていけばよいのです。

そして、製造技術が高くなれば、それを海外に輸出し、外貨獲得の手段とする。アフリカは、野球が盛んな南北アメリカ大陸に近い。そして、ヨーロッパで野球が盛んな地中海沿岸諸国にも近いのです。日本や中国製造するより、人件費が安いことも考えると、相当なコスト削減を図ることができ、競争力のある製品をマーケットにのせることができます。

(4) アフリカ野球産業の課題と戦略

しかし、問題はお膝元のアフリカ現地でどこまで需要を喚起できるのかにあります。

これには、戦略的な方法をとる必要があります。

アフリカに、野球と同時に三角ベースを普及させる。簡単にいえば、戦後日本で野球が普及発展してきた経験を生かし、野球を知らない少年少女には、道具がなくてもできる三角ベースを紹介し、ある程度体力と経済力のある子供たちには野球を教える。この両輪作戦を展開していけば、日本以上に野球がスピーディーに普及していくこともあり得るのではないのでしょうか。

野球はルールが複雑で、理解するのは識字率の低い地域ではよりいっそう困難といえますが、三角ベースから入れば、1日でルールは理解できますし、それでいて野球の醍醐味をしっかりと味わうことができます。

(5) 人材育成の重要性

とにかく、普及活動を進めるのにあたって、これだけは断言できます。アフリカに野球が普及していないのは、アフリカに野球道具がないからでも、アフリカ人に野球は理解できないからでもない。アフリカに野球がないのは、「野球を教える人がいないから」です。これについては、ベースボールアカデミーを設立し、システムチックに野球人材を育成することが重要です。プロ野球選手が輩出されるようになれば、その成功を夢見る青少年が増え、普及活動に弾みがつくことが期待できます。

世界の野球を救うためには、アフリカに野球を普及させることが、まさしくキーになると思います。

3. マスタープランのビジョンと目標

(1) ビジョン

世界の野球普及のキーをアフリカの野球普及であることとし、次のように定義づけします。

『アフリカに野球産業を興し、世界の野球の普及発展の拠点とする。』

アフリカにおける野球の普及発展がアフリカの貧困削減のための雇用創出、輸出産業の振興を促進し、野球人口の増加と、周辺諸国（アフリカ大陸、南北アメリカ、ヨーロッパ）の野球人口増加に寄与する。ひいては、オリンピック種目の復活につなげる。

(2) 目標

これを目標としてまとめると次のとおりです。

1) スーパー上位目標：世界に野球が普及する（オリンピック種目に野球が復活する）

2) 上位目標：アフリカに野球産業が振興する

3) プロジェクトレベルの到達目標：

- 1 アフリカに野球道具の工場ができ、製造・輸出ができるようになる
- 2 アフリカに野球学校が設立され、プロ野球に人材が輩出されるようになる
- 3 アフリカの学校に野球（及び三角ベース）が紹介され、野球人口が増加する

(3) 拠点の地

ビジョンにある野球産業の拠点は、ガーナが最適です。政情、治安が安定し、人件費が安く、野球道具製造に必要な原材料が入手しやすい（ガーナは木材輸出国、ゴムは同じ西アフリカのナイジェリアが産出国であり、西アフリカ経済共同体（ECOWAS）によって低い関税で輸入が可能）というメリットがあります。

さらに、輸出を考えた場合、ガーナの地理的な位置づけは、野球が盛んなアフリカの国のなかでもっともアメリカとヨーロッパへの距離が近い地域に属しています。

ちなみに、日本人がスポーツ政策の一環でかかわったアフリカの野球は、ジンバブエ、ガーナ、ウガンダ、南アフリカ共和国の4カ国ですが、野球連盟の上部機関に今なおパイプがあるのは、ガーナと南アフリカ共和国です。南アフリカはアフリカ随一の先進国ですので、自立発展が可能。アフリカ全体をバラ

ンスよくカバーするためにも、拠点は親日国でもあるガーナがふさわしいと思われま

4 . ビジョン実現のための実行計画

ビジョンを実現するために必要な投入（ヒト、モノ、カネ、+ ）は次のものがあげられます

ヒト：野球技術指導者、野球道具製造技術指導者

モノ：初期投資の野球道具、野球製造のための機材、ベースボールアカデミーの施設と設備、野球道具製造の施設

カネ：ヒト、モノ投入するための資金と管理する基金設立

+ ：人々に野球に対する関心を引き起こすきっかけ（野球に対する認知度アップに必要なもの）

ヒト、モノ、カネの投入が仮にできたとしても、肝心のガーナの人々のニーズや主体性、オーナーシップがなければ、持続発展は望めず、単なる日本人の自己満足に終わってしまうどころか、すべてが中途半端に終わり失敗する可能性のほうが高いと思われま

このビジョンを目標として進めていくためにもっとも大事であり、かつ難しいことは、いかにガーナの人々の「やる気」を喚起し、本気になって取り組むのか、ということです。

この視点を踏まえ、以下、短期計画、中長期計画を作成しました。

（1）短期計画（2007年の計画）：ガーナ野球の復活（野球人口増加）

1）ガーナナショナルチーム復活プロジェクト（北京オリンピック挑戦）

アテネオリンピック予選出場断念を期に解散状態にあるガーナ野球チームを復活させるため、起爆剤となるきっかけが必要。ガーナ政府のお墨付きを得る必要がある。さらに最低オリンピック予選（2007年9月もしくは10月）まで長期滞在する人間が必要。

また、チーム強化のため、適宜ハイレベルなコーチを派遣するほか、オリンピック予選直前には合宿を行う。

ガーナ・ナショナル野球チームを蘇生するには、ガーナ政府に対し相当なインパクトを与えない限り実現はきわめて難しい。アフリカ野球友の会は、これまでガーナ・チームのアフリカ大会参加費用（約20000ドル）の寄付により実現を図ることを検討している。

現在、大手テレビ局がガーナ代表チームを素材にした番組を検討中。

ガーナ政府への根回し、マスメディアへのアプローチ、さらにナショナルチームメンバーの候補選手の招集は、アフリカ野球友の会が有するネットワークで対応可能。

2) 北京オリンピックへの挑戦のPR(ガーナ人への認知度アップ)

最後のオリンピックに挑戦することをガーナ国内でPRし、ガーナの青少年、一般市民に夢と期待、希望を与えるとともに、野球人口増加の起爆剤とする。

3) アフリカ野球振興基金

ガーナ・ナショナル野球チームのチャレンジを日本国内でアピールし、募金、協賛を日本国内で募り、上記1)、2)ならびに(2)中期計画を下支えする基金を設立する。

基金の運営は、アフリカ野球友の会と現地のNGO「ベースボール・ガーナ・ファウンデーション：BGF」が管理し、モニタリングや報告を行うことが可能。

(2) 中期実行計画(2008年から2015年まで): アフリカ野球拠点化にむけた行動

1) 野球人口増加活動(ガーナ国内にクラブチームの設立、運営)

ポスト北京オリンピックをにらんで、当面の目標をクラブチームによるリーグ戦運営により、野球人口の増加をはかりつつ、将来的にプロ野球にチャレンジする人材を育成する。

同時に三角ベースをガーナの学校教育プログラムとして採用し、簡単に野球を覚え親しむ機会を提供し、底辺拡大を図る。

2006年2月にガーナ三角ベース普及プロジェクトを実施し、教育省副大臣よりその旨意向が示されました。

2) ワールドベースボールクラシック(WBC)への挑戦(オリンピック種目の野球復活まで)

ナショナル野球チームの次なる目標として、2010年WBCのアフリカ代表を目指す。

2010年はIOCにて2016年オリンピックの野球復活が決議される見込み。

3) 野球学校(アフリカベースボールアカデミー(ABA)設立と人材育成 門戸をアフリカ全体に開いた人材輩出拠点となる野球学校を設立する。

- 1 学校用地の選定、購入
- 2 学校の設計、建設
- 3 野球場の用地購入、設計、整備、建設
- 4 指導者の育成

4) 野球道具製造工場の設立と人材育成

野球人口増加に対応すべく、日本のメーカー（ミズノ、アシックス、など）の協力を経て、グローブ製造技術や、バット製造技術の指導を行い、人材育成を図る。そして、職人を一手に集めて工場を設立し、将来の輸出化を目指し、技能向上を図る。

- 1 工場用地の選定、購入
- 2 工場の設計、建設
- 3 道具工場の機材供与
- 4 野球道具職員の育成

(3) 長期実行計画(2015年以降)

- 1) アフリカ野球拠点の継続フォローと、他のアフリカ諸国への波及
- 2) メイドインアフリカの野球道具の輸出、販路・市場開拓(対アフリカ、ヨーロッパ、南北アメリカ)
- 3) 世界のプロ野球へ人材輩出(東アジア、ヨーロッパ、南北アメリカの野球リーグ)

5. おわりに

世界に野球を普及させるキーはアフリカにあります。その理由は述べたとおりですが、この定義に感覚的に違和感を持つ方も多いかと思います。しかし、2000年の国連ミレニアムサミットにて、21世紀の人類の最も大きな課題は、アフリカの貧困問題であり、支援の強化が必要であることが世界中の首脳が一同に会する総会で合意されています。

厳しい環境に生きるアフリカの人々に野球を通じてエンパワーメントのお手伝いすることは、大いなる国際貢献となり得る活動であると思います。

平和的なスポーツ、野球が、世界中に広まったとき、世界は平和になる。

人と人が向き合ってお互いを思いやり、理解するキャッチボールを世界中の人ができるようになったとき、争いがなくなり、平和が実現する—そう信じて「アフリカ野球友の会」は「キャッチボールで世界を平和に！」をスローガンに定め、活動しています。

一人で見える夢はただの夢ですが、みんなで力を合わせて見る夢は実現への道となります。

一人でも多くの方と、この夢を共有し、協力して、実現していきたいと考えています。

以上

<作成：2006年8月30日>